

日本

ハンザキ研 究所ニユ - ス 2009(4) : 通巻 No.40

発行 2009年4月30日

〒679-3341 兵庫県朝来市生野町黒川292

Tel / Fax: 079-679-2939

E-mail: info@hanzaki.net

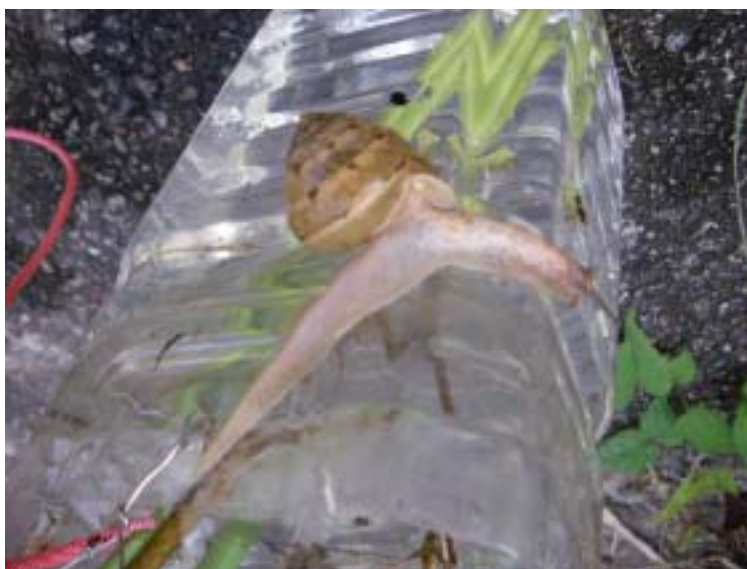
NPO 法人 日本ハンザキ研究所 栃本 武良

ハンザキ研をめぐるスター

ヤマタカマイマイ

マイマイは「カタツムリ」のことだ。そして、軟体動物の仲間なのでサザエやアサリなどと同じグループになるが、陸上での生活に適応した貝ということになる。タコモイカも軟体動物だが、イカには貝殻の名残の透明な中骨とか石灰質の舟と俗称される物がある。カタツムリの殻を取ってしまったのがナメクジだ。生野にはヤマナメクジという全長15センチにも伸びる大型の種類がいる。

ハンザキの夜間調査をしていて、疲れたので帰ろうとして途中の崖をよじ登っていた時に、目の前の木の枝に何とも不細工なマイマイを見つけた。殻はタニシのように膨らんでいて、体の軟体部は細長〜く伸びたナメクジそっくりであった。



兵庫県では今年もカタツムリの一斉調査が行われている。残念なことに但馬地域は情報不足と言われているので、何とか調べて報告したいと考えていますが、種類を見極めるのが難しい。同じ種類でも殻の模様が違うので素人には同定しがたい。面倒くさいのでマイマイ狂である姫路市立水族館の増田さんに同定を全面的にお願いした。報告先はこのたび開館10周年を迎えた西宮貝類館に集められることになっているので、関心のある方は調査に挑戦してみてください。雨の日のブロック塀を這い回っているマイマイたちが何をしているのかご存知でしょうか？ 殻を作るカルシウムを齧り取っているのだそうである・・・



写真1 花粉に煙る助広山

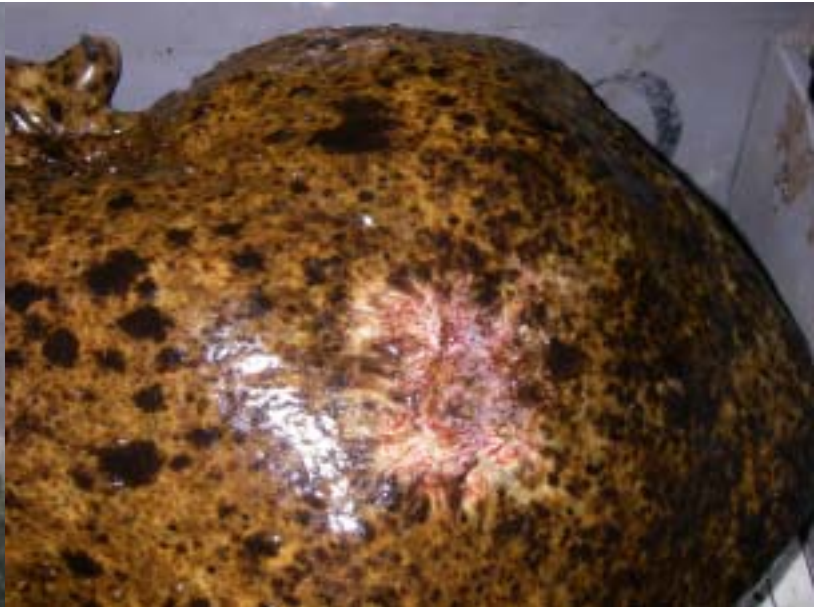


写真2 黒主の新たな傷跡



写真3 小石の数より多いチリメンカワニナ



写真4 姫水からのハンザキ



写真5 モニターに写ったアンコ淵3代目



写真6 5年の追跡で死体となる

黒主はいずこへ？

平成 16 年に、ハンザキ研上流の市川支流長野川で登録された黒主(977)は、平成 18 年 4 月にハンザキ橋下にあるアンコ淵の巣穴を初代大倉主から奪って 3 年間住み着き 3 回の繁殖にも成功しています。今月の 12 日夜、ビールを飲みながらパソコンの画面を見てると全く体の斑紋が異なるハンザキが現れて巣穴にためらい無く入っていったのです。この個体は、穴から頭を出してもあまり日中の外出をすることが無かったのですが、夜間に出てきた所をパソコン画面の撮影によって斑紋の特徴から 692(全長 92 ㍉)のオスであることが判明しました。昨年の 9 月 12 日の繁殖集団に加わっていた個体でもあります。

さて、今月には年に 1 回の黒主測定を予定していたのですが、姿が消えてしまったので探しに行こうかと夜間調査を計画していましたが、30 日になってハンザキ橋の上流側に出てきたのを見つけて採捕しました。頭頂に怪我をしています。闘争による咬傷ではなさそうです。元々、黒主と言う名前は頭頂部が傷の治った後で黒くなっていたのがその由来でした。しかし、最近はだんだん薄くなっていたので名前がふさわしくないと思っていたのですが、受傷していたので再び黒化して“黒主”らしくなることでしょう。

さて、肝心の全長測定結果は、やはり 99 ㍉のままです。長野川での最初の測定値は 100 ㍉でしたが、アンコ淵での 4 年間で 4 回の測定では 99 ㍉のままです。体重の方も当初は 7.3 ㌘あったのが、毎年減少しつつ 5.1 ㌘にまで痩せてきました。この成長の無さはどのように考えたらいいのでしょうか？ その一つの答えは、昨年の繁殖期における黒主の行動です。8 月の半ば頃からアンコ淵の上下流にカニ籠トラップを仕掛けて集合してきたハンザキを採捕して 15 匹を確認していました。その内 12 匹は総排泄腔開口部周辺の隆起が認められオスと考えられます。残る 3 個体の内 1 個体は産卵のあった 9 月 12 日に総排泄腔からゼラチン状の紐が出ていてメスであることが確定しました。2 個体も腹の大きさからは多分メスであったと思いますが断定は出来ません。

この時期の黒主は一日中、たびたび出勤しては巣穴の周辺に潜むライバルたちを探しては激しく咬み付いて追い払う行動を示しました。それは 12 匹のオスを相手の激しい戦いですから、かなりのエネルギーを費やしたと考えられます。そのために、黒主は折角溜め込んだエネルギー源を消費せざるを得なかったのではないのでしょうか。“恋するオスは痩せ細る”のだと言うのが結論です。

痩せてスマートになった黒主は、しばらく休養して体力を回復してくれるものと思います。そして 1 ㍉を超える堂々たるオスとしてアンコ淵に戻ってきてほしいのですが、いかんせんこの巣穴の出入り口は狭いので、大きくなってしまうと入ることが出来なくなります。主の交代はどのように行われたのかわかりませんが、留守の間に入り込まれると狭い出入り口ではなかなか奪い返せないと考えられます。幸い、黒主は橋の下にある旧・橋脚台の下を仮の宿としているようですので、再び入れ替わることになるかもしれません。今後の経過をお楽しみに！！

お知らせ

オオサンショウウオの会 in 日南(鳥取県)

第6回目の会ですが、今年は10月3～4日に開催されることになりました。広島・島根で始まり、ハンザキ分布の東限の岐阜県、次いで西限の大分県、シーボルト・ハンザキゆかりの三重県、昨年は当地の朝来市で開催されてきました。各会共に素晴らしい有意義な会であったと思います。多くの方に参加をお願いします。

当「日本ハンザキ研究所ニュース」のバックナンバーについて

月刊で頑張っていますが、NPO 会員には翌月にはメール、郵送でお届けしています。読んだ感想をお送りいただけるといいのですが、いかがでしょうか。また、一般の方へも情報の発信と言うことで、ホームページの会誌を見ていただくと、創刊号から1年前まで(2008年3月号)のニュースレターを読むことが出来ます。読後感をお送りください。

6月のイベント

平成18年3月に山水を入れたモリアオの池では、50卵塊もの産卵が続いています。夜間に産卵することが多いので、19時～21時の観察会を6日に行います。例年5月半ばからの産卵が始まりますから、当日には多数の卵塊を見ることができます。明け方にも産卵することがありますので、近くの民宿を予約して早朝の観察にも挑戦してみてください。

姫路市立水族館からハンザキ2個体がやってきました

水族館は昨年の11月に休館となりました。この先、2年ほどをかけて耐震補強や旧・モノレール駅舎などを改造して再開する計画です。多くの魚類は希望する他の水族館に引越しました。ハンザキは文化財保護法で現状変更の許可を文化庁長官からと、種の保存法で国内移動の許可を環境大臣から受けねばなりません。そのために時間がかかり、今月8日にやってきました。この2匹は私が現役時代に飼育していた個体なので、久しぶりの対面となりましたが、1匹は白化が進んでいるようで沢山のハンザキの中に入れても目立ちます。

同時に、卵から育てた2個体も運ばれてきて放流しました。1987年生まれの21歳と2001年生まれの個体です。21年間飼育して全長が98センチにも育っていましたが、この個体は5歳のときに右前肢上腕骨の途中から先を仲間咬みきられてしまいました。その後、腕が伸びてきて4指頭を供えた指まで再生してきました。時々レントゲン撮影をして骨の再生を見ていたのですが、9歳までは骨が写らなかったため、爬虫両棲類学会で発表しました。ところがその後でウッスラと骨が写りだしたのです。学会には訂正の発表をしましたが、こんなことで長期飼育になってしまったのです。ちなみに野生の個体では欠損した指はほとんど再生しません。餌事情の厳しさが伺われますが若さもあつての再生かもしれません。

森林王国のまっただ中で花粉のシャワーを浴びる

今年は杉・檜の花粉大発生予報が出ていた。そのとおり13~14日のすさまじい花粉飛散の状況を目の当たりにすることになった。両日共に強い風が吹きまくり、校庭の南側にある植林地帯からはケムリが立ち上っていく。風が吹き付けるたびに噴煙のように立ち上ったり、たなびいて山が霧に包まれたようになる(写真1参照)昔、新聞にそんな光景が出ていたが木を揺すったりしてのやらせだろうと考えていたが大間違いであったことを実感させられた。教室内の机の上が白っぽくなっていて埃かと思って拭いたら黄色くなった。猛烈にまぶたが重く鼻水が止まらず閉口したが、こんなに花粉にやられたのは初めてのことだった。

35歳で生野のハンザキ調査を開始して5年目には花粉症になった。始めは檜に反応し次いで杉のシーズンも駄目になり、結局の所今ではほぼ1年中何等かにアレルギー反応を起こしている。耳鼻科の医師から体質改善を薦められたが、もう30年以上の付き合いだし、ロスタイムも高が知れているので目薬と添鼻薬でしのいでいる。

間伐もほとんどされずモヤシのような植林地帯の黒い森とか暗い森と表現される光の林床に届かない保水性に劣る植林地帯、ひとたび大雨が降るとなぎ倒された杉檜が川になだれ込み橋脚に詰まって洪水を起こしたりする。枝打ちされない杉檜は良材に成らないと、いいところ無しの植林である。何とかならないものだろうか？花粉の少ない種類があるそうだが、放置林の処理が先決だ。

.....

加古川の高砂堰用水路の清掃

毎年、4月29日には水を落として溜ったゴミや泥を取り上げる作業が行われる。同時に多くの魚などを捕獲するのを楽しみに人が集まる。今年は初めての参加であったが、6時半に生野を出て8時前に着いた頃には、ほぼ採り尽くされていた。早い人は午前5時の夜明けと同時に水路に入ったそうである。

白陵中・高校の生物部員が西口教諭と共に多くの水族を採集していたので見せていただいた。大きなギギやテナガエビ、イシガイ、ササノハガイなどが見られたが大部分は再放流するのだそう。年中行事として多くの人々によるこの魚取りが行われていても、これだけの水族が再び入り込み繁殖しているのだろうか？

遅ればせながら、水路に下りて観察を始める。水路には踏み潰さずには歩けないくらいのチリメンカワニナがいた。1時間くらいで5^キくらいのカワニナを拾い集めた。ゲンジボタル幼虫の餌にはあまり向かないとの事であったが、とりあえず生野ダム下流の工事現場に作られた閉鎖系水路に放流することにした。浅い水路なので野生動物の餌になってしまいかも知れず生き延びることが出来るのかどうかを観察していくつもりだ。カワニナがいない市川本流のこの水域だが、野放しにする放流は慎むべきだろう。

ハンザキ研日誌

2009年4月

- 2日 積雪5㍉、昨日のウッスラ雪化粧に続いての雪である。
本日から、生野ダム下流の竹原野地区の左岸側工事に先立って、ハンザキの救出が再開。初日には、上流部全域の踏査によって“ツチノコ”君の探索も実施したが発見できず。
- 4日 NPO 事務局会議(9名で、5月の総会などへの準備について)
- 6日 来年の愛知県で開催される“COP10”(生物多様性条約締約国会議)における日本の誇る生物の紹介ビデオ作成のために、NHK ハイビジョン企画事前打ち合わせ
- 7日 近畿地方整備局の木津川水系川上ダム建設に一石を投ずべく「オオサンショウウオ・シンポジウム」開催について川上聡氏他来所
- 8日 姫路市立水族館のオオサンショウウオ2個体を、同館再開まで預かる。
右前肢上腕骨途中から咬みきられて再生した個体(21歳)の放流
- 12日 アンコ淵の巣穴に2代目黒主に変わって別の個体が入る姿をモニターで確認
- 13日 校庭の南側にある杉檜の植林で花粉の噴煙が立ち上る。まぶたの重い一日
- 16日 ハンザキ死体の連絡を受けて収容、1115で5年間の追跡だった
- 17日 地元・黒川区の新役員7名と初めての懇談会
- 18日 県立人と自然の博物館・鈴木タンポポ博士、来所(校庭にはセイヨウタンポポや交雑種が見られる由。朝来市は情報不足との事でタンポポ調査の実施をする予定)
- 20日 和亀保護の会・西堀代表ら3名来所、イシガメ3個体チェック、21個体目の登録
- 24日 竹原野の水切り調査で、昨年のハンザキ幼生個体8収容
- 26日 282回調査終了(3月28日~)
- 28日 283回調査開始
- 29日 加古川の高砂堰用水路清掃作業に伴う水族採集へ(チリメンカワニナなど)
カニ籠調査~5月1日、モンドリ調査~30日
- 30日 アンコ淵の巣穴を三代目に乗っ取られて、行方不明であった黒主を発見測定したが4年連続で99㍉のまま、頭部に新たな傷が・・・

ハンザキ所長のツブヤ記録

殺人的なスケジュールをこなした3月が過ぎ、新年度になって一段落かと思ったが、そうは行かないようだ。なんでかな~?と考えてみた結果は、結局の所やりたい事がありすぎるだけなのだ。あせらず、その日その日に出来ることをやっいていこうと思いを固めても、行く先々についつい手が出ては、前のことを忘れてしまう。組織としての行動も含まれてきて、束縛されることも多い。今月も夜間調査は実施できなかったが、無理はしないでマイペースを保ちつつ、やりたいことをやっいていこうと思っている。